

戦後四十五年、復興した日本で私共が幸せな日々を送ることが出来ますのも、国のために殉じた同胞の加護によるものであり、感謝し、今後、過ちのない永遠の平和を祈念するものです。

私の人生体験

北海道 白川 ハギ

初めに今までのことを振り返って見ますと色々の体験がありました。もっとも大きかったことは樺太での敗戦でした。このありさまを私の子供や親戚孫友人等に残しておきたいと思っておりましたが、どうすればよいか分からないまま歳月は過ぎてゆき、私もだんだん年を取ってくるので一つ一つを思い出して書いてみましたが、なにせ遠い昔のことです。又無学なため大変読みづらと思います。

私は明治四十二年六月三十日利尻鬼脇に生まれ、おじいさん伯父さん夫婦おじさん四人おばさん一人父母の大

家族の家に生まれ大変幸せであったそうです。

明治四十三年に樺太に皆で移り暮らしそうです。父は馬が好きで馬の仕事をしておりました。冬は出稼ぎに歩き家族を引きつれ私も一年生のときには学校を三回も転校し字を覚えることが出来ませんでした。真岡郡蘭泊村富内岸沢にて六年生の頃はとても健康で走ることが好きでよく選手として真岡の学校へ行って走ったものでした。六年生を卒業して蘭泊寺町に暮らししました。人様のごはんをたべなければ一人前の人になれないということで庁立真岡病院に奉公に出されました。仕事は入院患者の食事を作る所でした。それは大正十二年九月一日関東大震災があったときでした。

私が十六歳のとき家が忙しくなったので家にかえり家の仕事を手伝ったのです。

家には常時人夫を三人ぐらいますが使っておりまして。おじいさんの友人で福井さんのお世話で瀧端松治がこられました。大変真面目な人だったので父母はとても気に入りました。

父は昔の人のため学問はなく、無学のため、仕事上の

ことは皆漏端に任せており大変頼りにしていたようです。私が十七歳のときでした。福井さんの強い勧めで漏端と結婚することになり、年が九歳も違うので私は内心嫌いでしたが父母が望んでいるのをこばむことは親不孝と考えて、仕方ないものとあきらめ結婚をしました。

私が十八歳のときでした。漏端の父が亡くなり葬式のかえり馬一頭持って帰って来ました。その馬はそれから四年半の間我が家の暮らしの生計を成り立たせてくれました。やがて長女愛子が生まれ三歳になったころから一緒に育った白川末吉、私の弟と一緒に育ったもので争いごとが多くなるので別々に暮らすようになり、初めて松治と所帯を持つことが出来ました。

漏端も自分の馬で本当に良く働きました。とにかく無駄使いをすることが大嫌いな人で家のことは切り詰められるものとはことん切り詰めてお金を残さなければきげんが悪くなるので、私も随分と辛抱を強いました。

一生けんめい毎日の生活に精を出して過ごしました。昭和四年までに貯めたお金は千円でした。あのころの千円はとて大金で今の金額に直せばだいたい六千万円ぐ

らいかもしれません。そのお金を持って私の伯父さんと二人で多蘭泊から船を一そう借りきって、鮭を満載し小樽に売りに行ったのですが一か月もかかり帰りには貯えたお金をすっかり使い果たし帰って来ました。そのことをいうとお前の伯父が勝手に使ってしまったとまた小言をいわれるしまつです。

六月二十四日に節子が産まれその頃は本当に不景気のまっさかりでした。隣のバター会社から頼まれて入社しました。三年勤めているうちに組合長の親戚の人を入社させるために止めさせられてしまいそのときは三女とも子が産まれていて三歳でした。その後小能登呂のバター工場に勤め出した。

そこでは敏夫が産まれ初めての男の子ということで大変喜ばれました。そこでは約十年ほど働いておりました。またそのころに戦争が始まり段々激しくなって来ました。脱脂乳でカゼインを作り雪印に出しておりそれは飛行機を造るときのでりでした。カゼインのかんそう場から火が出てもえ上がってしまいました。その工場は木工場と、製粉工場とバター工場で大変大きな建物でした。

組員や生産者の方々にやめないでくれるようお願いしましたが責任上辞めました。それで上恵須取に移りました。上恵須取に暮らしているときに終戦を迎えました。

次女節子が国鉄バスの車掌であったので十六日の朝、家に来て疎開している子供達を皆連れてくるようにいわれ迎えに行ったのですが、途中飛行機が来て私は機銃射撃されました。周囲には誰もおらず私を狙っての攻撃は確かなことでした。機銃の弾が五、六発バンバンバンと撃たれ全く生きた心地も無く命の縮む思いでした。それでも子供達を迎えに行かなければならず命からがらぶるぶるえながら必死で逃げました。私達の暮らしていた所は電気も無くラジオも無かったため日本の敗戦を知らずにいたのです。午後四時半頃バスに乗りました。運転手さんがバスが発車しますが空の方を見て下さい。飛行機が見えたらすぐ連絡下さい。そしてバスからおりたらなるべく早くバスからすこしでも遠くへ離れて避難するように言われました。

両脇を見ると顔見しりの村人達が野宿の用意をしておりました。私達は節子のお陰で無事に脱出することが出

来、本当にありがたいと感謝の思いを抱いたものでした。途中バス停で泊まり次の朝、名寄に着き汽車にのり汽車は無蓋車で鉄道の家族で満員でした。一晩かかって走り朝、大泊の波止場に着き初めて敗戦を知りました。

連絡船で稚内につき汽車に乗り留萌藤山町の官舎で暮らすことになりました。そこでは着のみ着のままでもなく軍の毛布四枚貰い六人で暮らして居りました。父母が長女愛子を連れて来てくれその子は二十歳でしたが体が悪くカリエス病でしたので父母の所へ疎開しておりました。父母が連れて来て下さったときまだ歩くことが出来たのですが、段々衰弱してきて骨盤のあたりの皮膚が破れ膿が出るようになり寝たきりになってしまい、学校の生徒の身体検査に留萌から医者と役所の人がかえりに家に来て愛子を診てくれました。栄養が足りないのでバターを上げるから明日役場に取りに行くように言われました。その日三月十五日は大雪でした。汽車で留萌まで行きましたが帰りは汽車が不通となり帰ることが出来なくて困っていると知人と会い合宿の便宜を図ってくれて助かりました。十六日朝起きるとお産の催しがある

ので大変と思ひ駅に行つたのですが昨日からの不通のため椅子の空き間がなく五時間立ったまま、しだいに陣痛がだんだんはげしくなりこまりました。家には小さい子供や病人がいるのでどうしてもかえらなければと思ひ必死でがんばりました。十二時二十分頃藤山駅近くになったとき破水してしまいました。汽車からおりて這うようにして家にかえり一時に無事優を産むことが出来ました。しかし優の誕生を喜ぶ間もなく愛子の命の火が消えました。思えば幸薄く何一ツとして喜びも知らずに死んでしまった。愛子には悲しみがいつまでも残ります。どうしようも無かつたことを今でも思い起こします。当時は着物も無く食べるものもなく親戚や官舎や村人達には言葉では言い表すことの出来ぬほどお世話になりました。昭和二十二年七月三十日瀉端が帰って来ました。帰るとすぐ大和田炭鉱で働きました。長男敏夫は大和田駅に勤め私も炭鉱で働きました。その炭鉱も北海道では一番初めに閉山となつてしまい、次男貞夫に世話してもらひ札幌豊平区白石の田中繊維工場の寮で働きましたが、身体を悪くして三年で止め静養しているとき、阿部ちい子さん

の世話で道庁の母子会の掃除婦として働くことが出来ました。

道庁爆破事件のあつた時には地下の美容院におりましたが、艦砲射撃を受けたような音でした。四十四年一月十九日瀉端は心不全のため死亡しました。朝は道庁に夕方には豊平区役所の掃除に精を出しました。どちらも十三年間働くことが出来ました。私は昭和五十八年まで働かせていただきました。私は明治大正昭和と平成と成りましたが今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。

引揚者体験の一断片（塩倉庫収容）

北海道 中川 教徳

昭和二十年八月十五日終戦の詔勅下る。後十日おいて八月二十五日未明、突如として樺太真岡の市街は、大砲と機銃掃射の発射音で庶民の夢は破られた。

真岡駐屯の旭部隊の応戦かな、と思つていゝうち、射撃音は益々激しくなる。教員住宅玄関のガラス戸に破裂